

**60歳超えたら「受けてはいけない」手術
70歳超えたら「やっけてはいけない」手術**

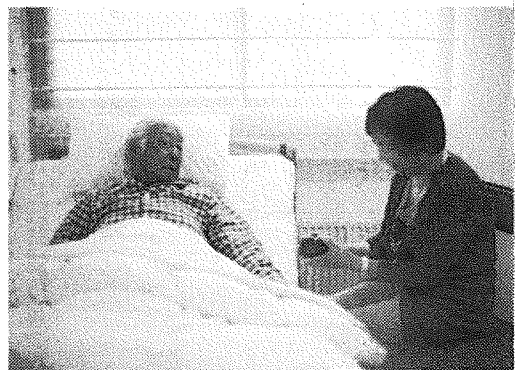
状態になってしまえば、身の回りの世話や術後の通院など、妻や子どもたちにも多大な負担を強いられるのは目に見えていた。「仮に私が寝たきり状態になれば、妻は私の介護に追われ、子どもたちも私の通院のために仕事を休む——。そんな事態だけは絶対に避けたかった。ただ、こんなことを話しても、妻たちには『考えすぎだよ』と笑われると思いました。なので、とにかく『手術だけは絶対イヤだ』『身体を切られるなんて気持ちが悪い』と、駄々をこねたのです。最初は妻たちも説得しようとしていましたが、あまりに私が頑なだったので、諦めたようです。いまは通院しながら、放射線治療が続いています。子どもたちは『お父さんは病気になるって意固地になった』と言っていたようです。たとえ私の真意が伝わらなかったとしても、これでよかったです。

かもしれない」と。勃起障害のことは伏せ、あくまで当たり障りが無い理由で説き伏せたのです」(同前)

青島さんは現在、抗がん剤治療が続いている。発覚から1年以上が経ったが、いまのところがん細胞が増大している様子はないという。

いくら知識や経験があっても、身内、特に妻から頼まれると、医師であっても判断を誤ることがある。医療ジャーナリスト・富家孝氏が話す。

「私の知人の60代の男性医師は、尿の出が悪くなったので、自分の勤務先の総合病院で『PSA検査』を受けました。PSAは前立腺から分泌される特異なたんぱく質で、血液検査で簡単に調べられる。検査したところ、彼のPSA値は高かった。PSA値は前立腺がんだけでなく、前立腺肥大でも高くなります。このため彼は検査を担当し



た同僚医師から『前立腺がんの可能性もある。確定診断のために生検(生体組織診断)をしたほうがいい』と勧められた。そのことを男性医師は自分の奥さんに相談したそうです。すると、奥さんは『がんだと手術しないといけない。がんかどうか調べるために生検を受けたほうがいい』と積極的に勧めました。それで男性医師は、自分の病院で生検を受けたのです」ところが、生検のために前立腺に針を刺し、細胞を取ったところ出血が止まらなくなり、前立腺

自体も大きく腫れ上がった。そのために尿道が圧迫されて、ただでさえ出にくかった尿が、さらに出なくなる。そして腎不全まで発症してしまった。前出・富家氏が続ける。「全身状態が急激に悪化し、病院側が男性医師の

重要なのは「本人の意思」

たとえがんであったとしても、手術の必要性が低いのは前章で見た通り。医師でも、妻が関わると、こうした事態を招いてしまうのだ。

前立腺がんだけでは無い。大阪府在住の児玉勝美さん(82歳、仮名)のケースを見てみよう。「ちょうど1年前、肺がんのステージⅢだと宣告されました。タバコも何十年も前にやめていましたし、自覚症状もなかった。だから、がんだと伝えられた時は呆然としてしまいました。腫瘍の大きさは3cmほど。医師が

家族に『万一のこともあるから病院に来てほしい』と連絡を取る騒ぎになりました。幸い、男性医師は危機的状況を脱し、体調は回復しました。結局、彼は前立腺肥大であり、前立腺がんではありませんでした」

も手術は避けなかったんです。放射線治療のほうがより効果的だというだけではありません。私は、この3年ほど前に腸閉塞で1週間ほど入院したことがありました。その際、元々身体が強くなかったうえに、治療のために絶食したことで、足腰がまるで立たなくなっていました。トイレに行くにも一苦労でした。医師に聞くと、私の年齢で肺がんの手術をした場合、計3週間近く入院する可能性があると。それだけの期間入院したら、今度こそ自分の足で歩けなくなってしまうのではと思ったのです」

児玉さんは妻と大阪市郊外の一軒家で二人暮らし。息子と娘とともに、車で2時間以上離れた場所まで暮らしており、家庭もある。自宅は古い家のうえバリアフリー化の工事もおらず、妻は運転免許も持っていない。仮に自分が寝たきり

家族に『万一のこともあるから病院に来てほしい』と連絡を取る騒ぎになりました。幸い、男性医師は危機的状況を脱し、体調は回復しました。結局、彼は前立腺肥大であり、前立腺がんではありませんでした」

診療所がある。なかには確かに信用できる赤ひげ先生もいるが、その反対に、ダメなヤブ医者も全国にはごまんといる。都内に住む50代の男性はこう嘆息する。「先日、風邪を引いたので、近所にある町医者に行ったら、70代くらいのかなり年配の医者で、抗生物質など5〜6種類も薬を出されました。風邪に抗生物質は意味がなく、それどころか『耐性菌』(抗生物質が効かない菌)を作り出すことが問題になっているのに、昔の知識のままで処方し続けているんです。それを指摘すると『嫌なら他の病院へ行けばいい』と言うので、もう腹が立ってね」

町医者の杜撰な診療により、人生が大きく変わった人もいる。ある80代の男性の話。この男性は、高血圧だったため、町医者で長く降圧剤を処方されていた。定期的に検査を行っていたが、血圧と

と書いています」

上尾中央総合病院心臓血管センター特任副院長・一色高明氏が話す。「特に高齢者の場合、手術で病気が治ったけれど、入院で足の筋肉が衰えて、歩くことが不自由になった、認知症の症状が出るようになった」とい

うケースはよくあるので。これでは、なんのための手術だったのか、わかりません。こうなった場合、一番悩むのは家族で、自分たちを責めてしまふ。本人は手術をやりたいくないけれど、家族はやってほしい。あるいはその逆というのも、日常

茶飯事です。本人の年齢や病状など、考慮すべき点はありませんが、やはり重要なのは本人の意思でしょう」

自分の身を案じてくれている身内の頼みは断りにくい。だが、その愛情こそが危険だということには忘れないほうがいい。

**国は「かかりつけ医を」といついせよ
町医者ばざりまちで信用でびるのか**

古い知識のまま薬を出す

現在、厚生労働省が推し進めている制度がある。それが「かかりつけ医」制度だ。「かかりつけ医は、フランスやドイツなど欧州では当たり前ですが、日本ではまだ浸透していません。簡単に言うと『一人一人、何かあったときに気軽に相談できる医者を近所に持つておきましょう』というわけです。病気になるれば、まず、かかりつけ医に相談して、手に負えない場合は大病院

に紹介状を書いてもらう。国は大病院と地域の医者の役割をはっきり区別させようとしているのです」

こう語るのは、著書に『こんな医者ならかかりたい 最高のかかりつけ医の見つけ方』がある医師の真野俊樹氏だ。現在全国には約10万の

診療所がある。なかには確かに信用できる赤ひげ先生もいるが、その反対に、ダメなヤブ医者も全国にはごまんといる。都内に住む50代の男性はこう嘆息する。「先日、風邪を引いたので、近所にある町医者に行ったら、70代くらいのかなり年配の医者で、抗生物質など5〜6種類も薬を出されました。風邪に抗生物質は意味がなく、それどころか『耐性菌』(抗生物質が効かない菌)を作り出すことが問題になっているのに、昔の知識のままで処方し続けているんです。それを指摘すると『嫌なら他の病院へ行けばいい』と言うので、もう腹が立ってね」

町医者の杜撰な診療により、人生が大きく変わった人もいる。ある80代の男性の話。この男性は、高血圧だったため、町医者で長く降圧剤を処方されていた。定期的に検査を行っていたが、血圧と

血糖値がやや高いこと以外に指摘は受けなかった。ところが、出血性胃潰瘍のため大病院に入院した際、クレアチニン値が高いことを指摘され、腎機能が正常の4分の1に低下していることが判明。降圧剤もすぐに止めたが、低下した腎機能は戻ることなく、透析治療をせざるをえなくなったという。一部の降圧剤は腎障害を悪化させる場合があり、

いい町医者の見分け方

ならばどんな町医者なら、信頼できる「かかりつけ医」と言えるのか。長尾クリニック院長の長尾和宏氏が語る。「私はこの分野しか診ません」という町医者が



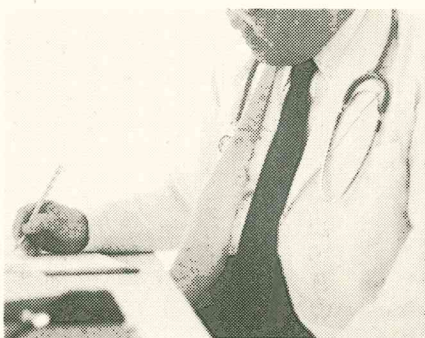
開業医でありながら在宅医療にも力を入れる長尾和宏医師

普通の病院ならありえない見落としである。国は「かかりつけ医」と声高に唱えるが、正直、こんな町医者に自分の健康管理を任せようとは、だれも思わないだろう。結果「やっぱり大病院じゃないとダメだ」と町医者に不信感を抱いている人は少なくない。そして、大病院の待合室には今日も患者が溢れ、長すぎる待ち時間は一向に解消しない……。

いますが、それはかかりつけ医としてふさわしくありません。高齢者は複数の病気をかかえていますから、いろいろな質問に答えてくれる「守備範囲が広い」医者が望ましい。これからの町医者は、専門分野だけではなく、総合医でないといけないんです。外科医であつても、意識の高い町医者は糖尿病の勉強会にも参加していますよ」

そういった意識の高い町医者やダメ医者を見抜くためにはどうすればいいのか。その病院のホームページにある医師の紹介文をよく読んでみてください。紹介文は自分の言葉で書くので、その医者の「ひととなり」が出るんです。患者さんへの「あいさつ」やどんな医療を目指しているのか、チェックしてみてください。

あつた院長の顔写真や出身医局、経歴などを公表していない病院も避けた。良い町医者は、患者さんに信頼してもらつたために、自分のことをもっと知ってもらおうと努力しますからね（長尾氏）。しかも、ダメな医師に限って、いくつも検査をやらせたり、大量の薬を出したりしてくる。「ちょっと調子が悪くて受診したのに、血液検査やCTなど、いくつもの検査をやる医者は信用できません。無駄な検査



を増やして、金儲けしようとしているんじゃないかと思いませんか」（前出・真野氏）病院コンサルタントの武田哲男氏も続ける。

「大事なことは、患者さん（顧客）のことを第一に考えているかです。たとえば、入り口に段差や階段がある病院はダメですね。高齢者や車椅子の患者さんのことを考えていない。細かいようですが、ちょっとした気遣いができるかどうか、診察にも表れるんです。あと若い看護師ばかりで、ベテランが一人もない病院も避けたいですね。何か問題があつて、長続きしてない可能性があります」

では、実際にどうすれば、良いかかりつけ医を見つけることができるのか。前出の長尾氏は「もともと信憑性の高い情報は地元住民の口コミだ」と言う。「たとえば近所の八百屋のおばちゃんや、地元の人のおおきい運転手に、この病院がいいか聞いてみてください。ネットの評判はウソも多いですが、長年住んでいる地元民の生の声は信頼できます。ネットの書き込みは気にしなくても、近所の主婦からの評価は非常に気になります。私のような開業医は、地域に信用されないといけないから」

病院選びを間違えると寿命を縮めかねない。これは決して大げさではない。もう一度、あなたが普段通っている町医者をお返ししてほしい。その医者は、あなたの「かかりつけ医」にふさわしいと思いますか？

入っていたために損することも

医療保険と「医療費控除で返ってくるおカネ」の微妙な関係

家族全員が対象になる

「やっぱり安心のためですから。車や家は保険に入るのに、自分の身体は保険に入らないのは変ですよね」

保険営業のそんな言葉を聞いたのは、25年以上も前のこと。今年64歳になる佐藤篤史さん（仮名）は、子どもも独立し妻と二人暮らし。年金をもらいつつもまだまだ現役とパートでの仕事を続け、収入を得ている。佐藤さんは39歳の時、「安心のために」と医療保険に加入し、これまでに計106万円もの保険料を払っ

てきた。保険の内容は、入院給付金が日額1万円。そのほか、ケガでの入院時におカネが出る特約や、先進医療特約をつけて、いざという時に万全の備えを取ってきた。

そのかいあつてか、今年の春に胃がんが見つかった際も30万円かかった医療費はすべて、医療保険で補うことができた。「医療保険に入っていてやっぱり正解だった。『医療保険は結局損だからいい』という意見もたまに目にする。たしかに払った金額は冷静に考え

れば、もらった金額より多い。それでもおカネを払ってきたことで安心を得られたのは大きい」

佐藤さんは自分にそう言い聞かせた。しかし、彼は、医療保険に入っていたことで、思わぬ損をしていることに気づいていなかった。本来、受けられるはずだった医療費控除について知識が不足していたのだ。

保険コンサルタントのおおきい納寛文氏が「医療費控除制度」について解説する。「医療費控除は、医療費がたくさんかかった年の所得税が控除され、翌年の住民税が軽減される制

度です。世帯ごとに合わせて計算し、年10万円を超える医療費負担については課税対象額から控除されます。意外に知られてはいませんが、入院、通院のための交通費や自己都合は除いた差額ベッド料、自由診療費、さらには薬局で買った薬代も控除できるので、非常に

お得な制度です。活用できていない人が多いのではないのでしょうか」だが、佐藤さんのように医療保険を利用してしまつたという事態が生じる。「医療費控除は実費負担した時に受けられるものです。かかった医療費がそのまま対象になるわけではなく、医療保険やがん保険でもらった給付金は引かれてしまいます。たくさん保険料を払って手厚い保障を得たと喜んでいても、控除を受けられるチャンスが逃しているケースが多いのです」（納氏）

具体的に計算したほうが、わかりやすい。佐藤さんのケースで考えてみよう。佐藤さんは30万円の医療費に対し、金額にあたる30万円の保険金を受け取った。ただしそれは、これまで月々の保険金を合計106万円も支払ってきたから、得られたおカネだ。

ここで、もし佐藤さんが医療保険に入っていなかった場合のことを考えてみよう。30万円の医療費を佐藤さんは貯蓄から出す。だが、医療費控除を申請することで戻ってくるおカネがある。まず所得税について、翌年確定申告をすれば4万円が戻ってくる。30万円から10万円を引いた20万円が控除の対象になり、そこにAさんの場合の所得税率20%をかけた金額だ。ここからさらに、住民税の分として2万円分も得をする（住民税は一律10%、翌年の住民税が安くなる）。

